

読む・知る・つながる大体大マガジン

OUIHS

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

Vol.239 2026.10.9
JOURNAL

〈巻頭特集〉
オープンキャンパス、
近年で初の申し込み
2000 組突破

〈旬な大体大生〉

第 59 回雨山祭実行委員長

下条 真子さん

SHIMOJO MAKU

大
体
大



大阪体育大学

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES



旬な大体大生

第59回雨山祭実行委員長

しもじょう まこ
下条真子さん

スポーツ科学部3年・体育科教育コース

大阪府出身。大阪体育大学浪商高校ではバレーボール部主将。1年から大学祭「雨山祭」の実行委員を務め、3年生の今年は実行委員長と学友会会長。バレーボール部女子では、昨年からバレーボール教室のアシスタントコーチとして、小中学生対象に指導。

第59回雨山祭 極祭

10月24日(土)、25日(日)
体育館・ステージ企画、フリ模擬
詳細は公式Instagramから



@ameyama2026

「雨山祭」の実行委員長という新たな役割に挑戦している下条真子さんは、学友会会長を務め、バレーボール部での活動と両立しながら、仲間や教職員、地域の方々と関わり、学園祭運営に奔走する。活動を通して感じたやりがいや成長、これからの挑戦について聞いた。



interview

〈下条真子さんに聞く〉

なぜ実行委員長に立候補したか

誰かがやらないと学園祭が開催できなくなってしまう、と考えた時に「それなら私がやるしかない!」と決意しました。1年時の実行委員での経験を振り返り、もっとこうしてみたいなという気持ちもあつたので、私が委員長になって挑戦してみようと思いました。

活動中大切にしていることは

とにかく明るくみんなが楽しめる雰囲気を作ることです。さらに、資料の作り方や外部の方との連絡の取り方など、何か一つで良いから身に付くよう、活動時にはみんなといういろんなことを話して、準備では様々な仕事を経験してもらっています。力を合わせて一つのものを作り上げる達成感を味わって欲しいし、自信を付けて「やってよかった」と思ってもらいたいです。

実行委員の仲間や支えてくれる周囲の方への思いは

地域の方からの励ましや教職員の方々のサポート、有志の同期や先輩方がいつも気に掛ける

てくれたおかげで、ここまでなんとかやってきました。そして、学園祭実行委員のみんなには、来てくれてありがとうの気持ちでいっぱいです。最後まで一緒に頑張る仲間に出会え、私ももっと頑張ろうと奮い立たされています。

準備を進める中で、自分自身が成長したと感じる部分は

委員長として活動するうちに、周囲をよく見て、一人ひとりの良さを見つける視野が広がりました。以前は一人で抱え込むことが多かったですが、仲間を頼ることも学びました。みんなで協力して取り組むことの良さを実感し、前向きに人を巻き込む力が身につきました。

これから大学生活で挑戦したいことは

将来、先生になりたいのか、指導者になりたいのか、どの年代の人と関わりたいのか、今はまだ決まっています。でも、学園祭の運営を通じてバレー部の中だけでは得られなかった経験ができたので、これからもいろいろな人と関わりながら、自分の進む道を見つけていきたいです。

東京ビッグサイトに出展 4.4 万人来場 SPORTEC 5年連続 河合スポーツ庁長官も本学ブース訪問

日本最大の国際スポーツ・健康産業専門展「SPORTEC 2026」が7月8～10日、東京都江東区の東京ビッグサイトで開催され、大阪体育大学は5年連続でブースを出展した。

世界中のスポーツ関係企業や自治体、大学、スポーツコミッション、団体など約550団体が最新製品・技術・サービス・研究成果を発表し、4万4000人が来場した。企業、官庁、研究機関などのほか、大学も東京大学、早稲田大学、東海大学など約20の大学、学部、研究室が出展した。

大阪体育大学は「大体大 連携力 エビデンス創出力」をコンセプトに、5枚のポスターでソフトバンク・



本学ブースを訪問した河合純一スポーツ庁長官

主催セミナーで対談する鈴木祥太さん(左)と藤本淳也教授



時代におけるスポーツ系大学の役割を問う」を開催した。ソフトバンク株式会社100%子会社のGeni AX（ジェナックス）株式会社AIEバンジェリストの鈴木祥太さん、藤本淳也・大阪体育大学DX・AX推進プロジェクトリーダー（スポーツ科学部教授）が講演とクロストークを実施。AIには事実の計測や情報整理を任せ、人は判断や意味の解釈を担うことの大切さを指摘。問いを立てる力、確かめる力、協働する力など、スポーツで培われる非認知能力は、AI時代に一層価値が高まるなどと語りあった。



ブースで本学の研究や事業を紹介した

富士通との産学連携事業、オンライン受講が人気を集める大学院スポーツ科学研究科、本学のスポーツエコシステムなど大学の研究・事業活動を紹介。ブースには連日、多くのスポーツ・健康・IT系企業のビジネスパーソンや大学などの研究者、自治体の関係者が訪れ、スポーツ科学部の藤本淳也教授（スポーツマーケティング）、沼田薫樹講師（測定評価学）ら教員や大体大スポーツ局などの職員が研究や事業などを説明した。

本学ブースには、河合純一スポーツ庁長官も訪れた。

また、会場で主催セミナー「AI

contents

01 旬な大体大生

02 東京SPORTECに5年連続出展

03 巻頭特集

夏のオープンキャンパス、近年で初の申し込み2000組突破

05 NEWS

- 1 野外活動実習多彩に
- 2 難関AT資格に9人合格
- 3 就活支援キャリアフェスタ
- 4 池戸J1岡山デビュー
- 5 鈴木がU20世界陸上5位
- 6 9月度修了式・卒業式
- 7 運動部活動指導認定プログラム
- 8 インパクトレポート完成

09 大体大PEOPLE

久保賢志・日本大学准教授

11 NEWS

- 9 本学で3度目の日本運動生理学会大会
- 10 プレイザーズ招き児童にバレー指導
- 11 大阪府警察官が本学でコーチングを学ぶ
- 12 徳之島の中高生が本学でスポーツ科学学ぶ
- 13 教育後援会役員会

13 コラム 窓

14 コラム ボーシャー

夏のオープンキャンパス大盛況 近年初の申し込み2000組突破

大阪体育大学の夏のオープンキャンパスが7、8月に計4日間開催された。合計の申し込み数は近年では初めて2000組を突破して2066組となり、昨年の19%増。最終日の8月8日（土）は4日間で最多となる651組の参加申し込みがあった。高校生からは施設の充実度や学生スタッフのフレンドリーさが印象に残ったという声が目立ち、大盛況のうちに閉幕した。



運営の中心は学生チーム「Bow!can's」(ボーキャンズ)。会場に到着した参加者を受け付けでお出迎え

体験授業、デジタルスポーツ…多彩なイベント 運営の主力は学生チーム「Bow!can's」

オープンキャンパスの運営は学生チーム「Bow!can's」(ボーキャンズ)40人が主役だ。説明会での司会、受付、誘導、キャンパスツアーでのガイドなど運営の中心を担った。説明会は開学50周年記念館で行われ、メイン会場の2階L201は来場者でぎっしり。神崎浩学長のウェルカムスピーチの後、三島隆章スポーツ科学部長、金子勝司教育学部長の学部紹介、吉田純子教職支援センター長の就職サポート体制の説明が行われた。また、8日のスポーツ科学部の紹介では、サブライズのスピーカーとして体育学部4年の西川陽菜(はるな)さん(兵庫・姫路南高校)が登場。参加した高校生に「大阪体育大学には選手だけでなくマネジャーやトレーナーとして選手を支えるなど、様々なかたちでスポーツに関わる学生が集まっています。『スポーツが好き』なら、入学する理由として十分だと思います」と呼びかけた。

キャンパスでは多彩なイベントが実施された。キャンパスツアーでは学生スタッフ

フが参加者を案内して屋内・屋外施設を巡り、高校生や保護者には学生とのフレンドリーな会話が好評。デジタルスポーツ体験会、テーピング実技体験会、体力テスト対策講座も盛況だった。両学部の体験授業では、高校生らが大学での学びの一端に触れた。

個別相談会では、入試、カリキュラム、学生生活など幅広い質問が寄せられ、一般の相談コーナーの他、両学部やA.T資格相談コーナー、現役学生とのフリートークコーナーも設けられた。



神崎学長がウェルカムスピーチ。皆さんの挑戦を全力で応援します



体験授業で講義するスポーツ科学部・橋本祐介教授(スポーツ医学)「君たちはスポーツ医学をどう生かすか」



キャンパスツアー。学生スタッフの案内でキャンパスを巡る。学生は何度も振り返り参加者に話しかける。学生とのフレンドリーな会話が高校生、保護者に好評だった



スポーツ科学部の特色を説明する三島隆章学部長「全国でも珍しい副専攻で、ハイブリッドな専門性を養成」



教育学部の特色を説明する金子勝司教授。「最大4つの免許・資格が取得可能。複数免許は教採試験で優遇措置を受け極めて有利」



デジタルスポーツ体験会。バーチャル空間でサイクリングを楽しむZwiftに挑戦する参加者



個別相談会。入試、カリキュラム、学生生活など様々な質問に回答した



体力テスト対策講座。総合型選抜で実施する実技テストを体験した

高校生20人に聞く

なぜオープンキャンパスが人気を集めているのか、会場で高校生20人にインタビューした（複数回答）。

参加した高校生からは施設の充実度や学生スタッフのフレンドリーさを挙げる声が目立ち、印象に残ったこととして、4人が「キャンパスツアー」と回答し、「施設が充実」「学生が優しかった」という趣旨の回答がそれぞれ3人だった。「キャンパスツアー」の回答では、「バレーボールの体育館を見たが、設備が整っていた。クーラーが効いているのいいと思った」（2年生男子、奈良県）など施設の良さを挙げる声が多く、充実した施設や設備が多く、高校生の心をひきつけていることが分かった。

沖縄県から一人で来阪したという小椋（おろく）高校3年の谷口晴信さんは「大体大に入学してアスレティックトレーナーを目指します。オープンキャンパスに来て、学生スタッフの方一人ひとりが本当に明るくて、雰囲気も楽しそうでした」と話していた。



高校生インタ
沖縄から1人で参加した谷口晴信さん(高校3年、中央)とボーキャンズ

オープンキャンパスの印象は？ 高校生20人インタビュー

Q印象に残ったことは？

- 「キャンパスツアー」4人
- 「施設が充実」3人
- 「学生スタッフが優しかった」3人

Q参加した理由は？

- 「すでに入学を決めているから」4人
- 「AT資格を取りたいから」4人
- 「体育の先生になりたいから」4人

Q大体大を知ったきっかけは？

- 「先生から教えられた」5人
- 「先輩が入学した」3人

Qこれから大学の情報を何で集める？

- 「大学HP」7人
- 「Instagram」6人
- 「先生に聞く」6人

Q意外だったことは？

- 「スポーツだけでなく勉強にも力を入れている」
- 「実技が苦手な学生がいることを初めて知った」
- 「体育だけでなく学びの分野が広い」

ボーキャンズ統括の大久保さん 「運営の質を向上できた」

——オープンキャンパスを終えた感想は
無事に終了して安心しています。来場者が増えて喜びを感じる半面、期待に応えるためのプレッシャーも感じました。メンバーが毎回、その日のうちに振り返りをして良かった点、改善点を話し合い、1回目より2回目、3回目と少しずつ運営の質を向上させることができたのではないかと思います。

——オープンキャンパスに向けてどんな準備を

昨年まではその年のオープンキャンパスに向けてスタッフを募集していましたが、今年から基本的に1年生から4年間所属するかたちに変え、新たにスタッフを募集し、例年以上に意識が高く意欲的に取り組む学生が集まったと思います。

キャンパスツアーでは、事前に大学エロやパンフレットに書かれてある施設の紹介文を暗記するだけでなく、授業で知った施設や大学の特色に関する情報を、全員がグループフォームに入力して共有しました。



ボーキャンズ統括(リーダー)の大久保樹(いつき)さん
(教育学部3年、兵庫・琴丘高校)



ボーキャンズ

——ボーキャンズに入って良かったことは
1年生の時、キャンパスツアーでガイドを務めました。昨年の春、ある新入生から「実は昨年、大久保さんとキャンパスツアーを回りました。大学選別に迷っていたけれど、ツアーでの説明を聞いて体大に決めました」と打ち明けられました。とてもうれしかったですし、オープンキャンパスのスタッフは人の人生を左右しかねない立場なので、重責をいっそう感じました。

海・山・湖で野外実習

野外活動実習が、各地で実施された。本学は、社会生活で不可欠なリーダーシップなどの非認知能力を養う場として、野外活動実習を重視している。技能や理論を身につけるだけでなく、野外活動が持つ教育的価値や生涯スポーツとしての価値を理解し、自然への興味・関心を高め、集団生活を通して豊かな人間関係や社会的態度を体験的に学ぶことも大きな目的だ。

施したほか、屋外でニューススポーツの「フリンゴ」を体験。続いて野外炊飯で火起こしから調理までを行った。2日目は砂浜で砂像を作るサンドアート、大人数でパドルを漕ぐカッターを体験。午後はOPヨット、ビーチバレーボール、ビーチフラッグスで盛り上がった。3日目は二人乗りカヌーを操船し全プログラムが終了した。

△野外活動実習プレバック△

◆アドベンチャーキャンプ実習（8月3～7日、琵琶湖畔）

スポーツ科学部2・3年生14名が参加。初日は開講式と、野外炊事の基本や方法を学び、溪流でシャワークライミングに挑んだ。2日目は約15キロの縦走登山。3日目は自然環境に関するレクチャーを受け、元五輪代表選手の指導のもと、ウィンドサーフィンを体験した。4日目は自転車で琵琶湖一周を目指し約90キロを走破し宿泊。最終日は約110キロ走りゴールした。

◆教育学部・野外活動実習Ⅰ（夏季）

（8月24～26日、岬町・大阪府立青少年海洋センター）

教育学部1年生27人が参加。初日は施設内を散策するオリエンタリングを実

◆マリンスポーツキャンプ実習（9月7～10日、徳島・YMCA阿南国際海洋センター）

体育学部4年生、スポーツ科学部2・3年生の合計36人が受講。初日はカヤックを体験し、夜に無人島の野々島でのキャンプに向けレクチャーを受けた。2日目は1人乗りヨットのダックリン、ジャンボカヌー、カヌーを体験した。3日目は悪天候のため、野々島一周、島キャンプは中止に。代替プログラムとしてテントの立て方の練習、野外炊事、カニ釣り、夜はキャンプファイヤーが行われた。4日目は桟橋から海釣り、シュノーケリングを体験した。



アドベンチャーキャンプ実習



アドベンチャーキャンプ実習。琵琶湖一周に挑戦



マリンスポーツキャンプ実習



野外活動実習Ⅰ（夏季）

難関のAT資格に9人合格 昨年の3倍合格者に聞く

日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー（AT）資格に、3月に卒業したばかりの7人と既卒生2人の合計9人が合格し、昨年の3人を大きく上回った。

ATの仕事はプロアスリートなどスポーツをする人に対する、けがの予防・スポーツ現場での救急対応・コンディショニング・リコンディショニング・身体の検査や評価・生活面や健康の指導管理など多岐にわたる。

合格した卒業生2人に聞いた。

◆二谷洋輔さん（セレッソ大阪アカデミートレーナー）

「セレッソ大阪のアカデミートレーナーとして、主に小・中・高校生の選手たちのコンディショニング、応急処置、リコンディショニングなどのあらゆる領域を一人で担当しています。Jリーグのトップチームで活躍することを目指していますが、Jリーグの場合は鍼灸師や柔道整復師といった医療資格を併せ持つことが必要だと感じています。医療的な知識をさらに深め、経験を積んでからトップチームで活躍するのが自分の夢です」

◆窪田小夏さん（中学常勤講師）

「中学生の時、体育の先生が熱中症になった生徒に的確に応急処置するところを見て、『応急処置ができる体育教師は絶対に必要だ』と思い、アスレティック

トレーナーという資格を知りました。AT資格と教員免許を持っていることが自分の自信につながっているため、学んだ知識を活かして生徒や教職員を守る教員を目指したいです」



学生時代の窪田小夏さん



学生時代の二谷洋輔さん

就活支援キャリアフェスタ 全3年生が企業・団体の話聴く

3年生全員を対象にした就職活動支援イベント「キャリアフェスタ」が、7月29、30日に開催された。

キャリアフェスタは企業や団体の採用担当者を招き、それぞれの企業の特徴や実際の働き方、採用に関するなどを説明していただき、学生の進路選択のきっかけにすることを目的に実施している。

学生は、クルビズのリクルートスタイルで、スポーツ科学部2クラス、教育学部1クラスに分かれ、担当教員やキャリア支援部の職員からルールと心構えなどの説明を受けた。

その後、参加企業・団体・学校ごとに用意された教室（ブース）で、1日4ブース、2日間で8企業・団体などの話を聞いた。

説明後、各ブースでは企業・団体の方とフリートークの時間が設けられ、学生は熱心に質問していた。

◆参加企業・団体など◆

クボタグループ、塩野義製薬、ダンロップスポーツマーケティング、近鉄グループ、ミズノ、IKK、大和リース、ニプロ、エバラ食品工業、野村證券、吉本興業、アルペン、大阪府庁、大阪税関、警視庁、東京消防庁、和泉学園（法務教官）、教員（大阪府立高等学校）、教員（中学校）、教員（小学校）、教員（特別支援学校）、大学院（大阪体育大学大学院）



「学生時代ナバールに行ったことをきっかけに日本で教員になろうと決めた」と語る本学卒業生の高校教員



講師に熱心に質問する学生

池戸がJデビュー J1岡山加入内定

サッカー部男子の池戸柊宇（いけど・しゅう）選手（スポーツ科学部3年、京都橘高校）が、日本プロサッカーリーグJ1・フアジーノ岡山に2027/28シーズンから加入することが内定し、7月22日、岡山から発表された。

池戸選手は185^{センチ}、77^{キログラム}の大型DF。2024年度日本高校選抜、2026年度第40回デンソーカップチャレンジサッカー刈谷大会・U-20全日本大学選抜に選ばれた。対人能力の高さと、圧倒的な空

中戦の強さが特長だ。

大阪体育大学サッカー部に在籍・登録したままJリーグ公式戦に出場できる「2026/27シーズンJFA・Jリーグ特別指定選手」として承認され、8月15日、ホームのJFE晴れの国スタジアムで行われたV・フアレン長崎戦で後半45分に途中出場。Jリーグデビューを果たした。



鈴木がU20世界陸上5位 女子やり投げ「支援に感謝」

8月の第21回U20世界陸上競技選手権大会（米オレゴン州）の女子やり投げ決勝で、鈴木彩夏（あやか）選手（スポーツ科学部1年、大阪体育大学浪商高校）が5位入賞を果たした。

鈴木は予選A組をシーズンベストの53^{メートル}13の2位で通過し、決勝は2投目に51^{メートル}80をマークした。

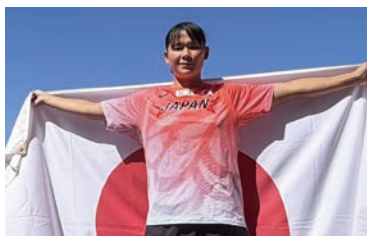
鈴木は高校2年だった2024年、国民スポーツ大会で優勝し、高校3年の昨年はU20日本選手権、全国高校選手権、国民スポーツ大会少年共通で優勝した。5月のU20アジア陸上競技選手権大会

（香港）では5位入賞を果たした。

また、7月にはフジテレビ『ミラモンGOLD』で紹介されるなど注目を浴びている。

鈴木彩夏選手の話

「予選は緊張していたことで、力が抜けて良い投げができたと思います。決勝はあまり緊張しなくて、その分余計な力が入ってしまいました。その中でも5位入賞ができたことは良かったです。サポーターにいただいた方々に感謝したいです」



9月度修了式・卒業式

令和8年度9月大学院修了式・大学卒業式が9月15日行われた。大学院スポーツ科学研究科博士後期課程1名、体育学部14名、教育学部2名の氏名が読み上げられ、一人ひとりに神崎浩学長から学位記・卒業証書が授与された。

また、スポーツで極めて卓越した成果を挙げた学生に授与される大島鎌吉賞が、2025年BFAアジアカップMVPの柏崎咲和さん（硬式野球部女子、体育学部、福井工業大学附属福井高校）に贈られた。



運動部活動指導認定プログラム 本学で実地講習

オンライン講座「運動部活動指導認定プログラム」の実地講習が8月7日、熊取キャンパスで行われ、中学校や地域スポーツクラブなどでの指導を目指す学生や、本学と連携する熊取町の部活動指導員ら約40人が参加した。

実地講習では、スポーツ科学部の土屋裕陸教授（スポーツ心理学）、中尾豊喜教授（学校教育学）、小林博隆准教授（体育科教育学）、元Jリーグ京都サンガ普及育成部長の池上正客員教授が講師を務めた。午前は、土屋教授がスポハラとは無縁の「グッドコーチ」に必要な条件をテー



土屋裕陸教授の講義を聴く受講生



中学生を指導した後、池上正客員教授と課題、反省点を話し合う受講生

マに講義。中尾教授は学習指導要領における部活動の位置付けや、学校部活動が果たしてきた教育的な役割、部活動改革が求める指導者の資質・能力などを解説した。

午後は実技講習。参加者は小林准教授の指導で、小林研究室がYouTubeで公開している約140本のミニゲーム動画から数種類を実際に体験。最後は受講者がグループに分かれ、バレーボール、サッカーなどのミニゲームを中学生に指導し、池上客員教授と指導を振り返った。

インパクトレポートが完成 大学スポーツの価値を可視化

大阪体育大学「大学スポーツ・サステナビリティ・インパクトレポート2024」が完成した。インパクトレポートは大学スポーツが生み出す社会的価値を体系的に示し可視化した、全国でも先進的な取り組みだ。

大学スポーツは競技力を高めることがすべてではなく、学生が学び、地域と交流し、多様な人々と関わる公共的な実践の場でもある。本学では、その実践を「社会を支える実践インフラ」と位置づけ、大学スポーツを社会全体の価値につなげたいと考えている。

インパクトレポートでは、価値創出の主要な担い手となる大学社会貢献センター、スポーツ局、クラブ活動の3つの2024年度の活動について社会的インパクト（社会に与えた変化や成果）を数値化した。事業数、運営学生数、活動日数（いずれも延べ）で社会貢献センターは15事業、2423人、96日、スポーツ局は17事業、324人、87日、クラブ活動は92事業、12697人、1095日だった。

制作責任者で広報・ブランディング委員長の藤本淳也教授（スポーツマーケティング）は「大学スポーツの価値は競技成績だけではなく、学生の成長や地域社会への貢献を可視化し、社会と共有することが大学の使命です。このレポ

トを対話の起点とし、持続的な価値創造へ発展させていきます」と話している。

大阪体育大学

大学スポーツ・サステナビリティ・インパクトレポート2024

— 2024年度活動のインパクト —

OUHS
College Sports Sustainability Impact Report 2024
— Impact of Activities in 2024 —

SINCE 1965

2026年7月

大学スポーツを通じて、人を育て、地域をつなぎ、well-beingに貢献する

大阪体育大学
Osaka University of Health and Sport Sciences



初の著書「スポーツの仕事、学問に変える」を出版 「甲子園など運営現場で流した汗を学問に」



日本大学スポーツ科学部・大学院スポーツ科学研究科准教授

久保 賢志さん

久保賢志（くぼ・けんじ）博士（健康学）
日本大学スポーツ科学部／大学院スポーツ科学研究科准教授
大阪市出身。大阪体育大学体育学部卒業。2008年、毎日新聞社に入社しスポーツ事業を10年間担当。2020年、関西大学大学院人間健康研究科博士課程修了。至学館大学助教・体操競技部部長兼男子監督を経て、2024年より現職（大学院は2026年より兼務）。

「**新聞社時代の経験は研究にどうつながっているか**」
毎日新聞社では全国高校駅伝競走大会や選抜高校野球大会などに関わりました。例えば高校スポーツには「教育」と「ビジネス」の両方の側面があります。一緒に大会を運営する高野連や高体連の先生方には「高校スポーツは教育の一環だ」という考えが強くあります。新聞社側もその考えは尊重していますが、一方でインサーや放映権を守る立場もあり、その間に

「**著書の内容は**」
実務と研究をどう往復するのかをまとめました。私は自分のことを「ハイブリッド研究者」と呼んでいます。スポーツの現場で感じた違和感や葛藤を、単なる日々の体験や成功談で終わらせず、学問的な「問い」に翻訳していく。著書ではそのプロセスの体系化を目指しました。私は新聞社で働きながら、博士号を取りました。「実務も経験しているけれど、研究もできる」「ハイブリッド」は、その両方を備えた研究者でありたいという意味です。

「**なぜ大阪体育大学に進学したのか**」
小学生のころから体操を続けていて、より高いレベルの環境で競技力を磨きたいと思いました。当時は体育教員になることも考えていました。

「**なぜ出版しようと思ったのか**」
社会人大学院生や実務家教員、若手研究者には、自分の現場経験には価値があるはずなのに、「どう研究したらいいのかわからない」という壁にぶつかる場合があります。私自身も仕事をしながら論文を書き、「経験をそのまま書いても研究にはならない」と感じました。その苦労の中で身につけた問いの立て方や、自分なりに実務を学問に「翻訳」した技術が、同じように悩んでいる人たちの参考になればと思いました。

入って仕事をする、時に葛藤が生まれます。それを体験談で終わらせず、「なぜ葛藤が生まれるのか」研究として明らかにしてきました。

本学卒業生で、日本大学スポーツ科学部准教授の久保賢志さんは8月、初の著書『スポーツの仕事、学問に変える―現場経験から問いを立てるという選択―』（創文企画）を出版した。久保さんは大阪体育大学卒業後、毎日新聞社の事業部員として全国高校駅伝や選抜高校野球の運営現場の実務で汗を流し、その後、働きながら大学院で学び、博士号を取得した。

久保さんは自らを「ハイブリッド研究者」と呼ぶ。スポーツイベントの現場で担当者として奔走した「実務家」と、スポーツマネジメントを学問として分析する「研究者」。二つの視点を持つ強みを生かし、著書では、現場で感じた違和感や葛藤を学問上の「問い」へと変えてきた経緯をつづった。

「目の前のことに泥臭く全力で打ち込む。でも同時に『なぜ』という視点を持つてほしい。体操競技と勉学に打ち込んだ大阪体育大学時代、新聞社時代、そして研究者としての現在まで、二つの姿勢を貫いてきた久保さんに聞いた。



大学時代の競技実績は

けが多かったのですが、関西インカレで団体3位、個人総合7位、新人戦では個人総合3位でした。全日本インカレは当時2部で、団体総合3位が最高成績です。

大体大の4年間で今につながっていることは

「なぜ」と考える癖がついたことです。

当時のクラブには、伝統や規律を重視して、与えられたことに従うという雰囲気が強かったです。でも私は、「なぜこれが必要なんだろう」「本当にこのやり方が一番いいのか」と常に考えていました。先輩からすると生意気だったはずですが（笑）。

「これは本当に常識なのか」と問い直す視点は、大学生のころから持っていました。それが今の仕事や研究につながっていると思います。

また、ゼミでご指導いただいた淵本隆文教授（バイオメカニクス）はどんな時も公平でぶれない先生で、物事の本質を見極める姿勢を学びました。難関の全国紙を受けると話した時も、「難しい」と否定的なことは言わず、可能性は誰にでもあるという姿勢で見守ってくださいました。研究室の近くで新聞社の採用試験の勉強もよくさせてもらいました。

淵本先生から「頑張り」と言われることもありましたが、それ以上に、先生のそばにいて「頑張ること道は開く」ということを肌で感じていました。

なぜ新聞社を志望したのか

大学では体操部でレギュラーを目指して頑張っていたんですが、けが多かった。プレーする側から、自分がスポーツという舞台をつくる社会に発信する側に回りたいという思いが強くなりました。

特に毎日新聞社は選抜高校野球や全国高校駅伝など、歴史と伝統のあるスポーツイベントを数多く運営していました。スポーツの感動や教育的な価値を広めたい。そして少しかっこよく言えば、「人々の記憶に残る仕事がしたい」と思っていました。

現役では合格できず、就職浪人しました。1年

間勉強し、2回落ちて、3回目で合格しました。

新聞社ではどんな仕事を

2008年に入社し、最初の3年間は大阪本社の人材総務部。2011年に事業部へ異動し、10年間、スポーツ事業を担当しました。全国高校駅伝はキャップなどとして10年間担当し、選抜高校野球では大会運営のサブキャップとして甲子園球場の大会本部に詰め、開会式で入場行進を先導したこともありました。

スポーツ大会は学校や競技団体、行政、警察、消防、テレビ局、スポンサーなど、多くの関係者との調整で成り立っています。結局、マネジメントは「調整」なんだと思います。それぞれ違う立場の人に意図を理解してもらい、お願いし動いてもらって、一つのものをつくる。その経験は今の研究にも非常に生きています。

なぜ大学院へ

当時は研究者になろうと思っていたわけではなく、新聞社の事業部員として自分の専門性を高めたいというのが一番の理由でした。

スポーツイベントは、私たち事業部員が中心となって運営し、多くの関係者と調整しながら大会全体をマネジメントしていました。ところが、大きな課題が出てくると、大学教員など外部の専門家の意見を聞いて方針を決めることがある。「現場のことは自分たちが一番分かっているはずなのに、自分たちは専門家とは見られていない」。そこに違和感がありましたし、悔しさもありました。

一方で、野球のことは野球の専門家、陸上のことは陸上の専門家が決める。自分は競技そのものの専門家にはなれない。それなら、スポーツイベントのマーケティングやマネジメントを学び、「運営の専門家」になれないかと考えました。

また、「研究が実際の現場でどれだけ役に立つのか」と感じることもありました。現場と研究を橋渡しできる存在になれないかという思いもありました。

新聞社で働きながら大学院に通うのは大変ではなかったか

めちゃくちゃハードでした。多分、人生で一番ハードだったと思います。博士後期課程では、仕事終わりに関西大学の梅田キャンパスへ通い、研究の作法を学びながら理論を構築していく作業との両立が本当に大変でした。特に博士論文を書いていた最後の3、4か月は、ほとんど寝た記憶がありません。

それでもやり切れたのは、大学院の恩師らの熱心な支えと2020年の新型コロナウイルスの発生です。スポーツイベントが相次いで止まり、不幸中の幸いというか、博士論文を書く時間を確保することができました。

博士号を取った段階で研究者の道に進む決意をし、2021年3月、13年間勤務した毎日新聞社を退職しました。4月から愛知県の至学館大学健康科学部で助教を務め、2024年から日本大学スポーツ科学部の准教授としてスポーツマネジメントを研究しています。

現在はどういうような研究を

主に二つあります。一つはスポーツイベントやメディアに関する研究です。例えば、大阪マラソンの統合について運営組織やランナーの視点から分析し、読売新聞社と関西大学による大阪マラソンの共同調査報告書にも約5年間携わり、調査・研究を続けています。

二つ目はオリンピック教育です。従来のオリンピック教育はオリンピックを学校に招いて話をしてもらうなど、単発の取り組みで終わることが少なくなかったので、トップスポーツクラブの後輩でもある北京五輪体操男子団体銀メダリストの沖口誠さんと連携。高校生を対象に、体操競技や器械運動を通じて周囲との連携や異文化への理解などを育む教育プログラムを開発、実践し、その教育効果を検証しています。この研究は科研費にも採択され、3年間継続して取り組んでいます。

これから研究者として目指すことは

実務と研究をつなぐ架け橋になることです。そして、次世代のスポーツ界を担う若い人材も育てていきたい。単に理論を知っているだけではなく、現実の課題に気づいて、自分で問いを立て、それを解決できる力を身につけてほしい

ですね。

「泥臭く」と「なぜ」を両方持つてほしい

大阪体育大学の後輩にメッセージを

まず、目の前の現場や競技に泥臭く、全力で打ち込んでほしいと思います。でも同時に、「なぜ」という視点を持ち続けてほしい。周囲の空気に何となく流されるのではなく、「なぜこうするんだろう」「これは本当に正しいのだろうか」と立ち止まって考える。社会に出れば、自分で考えて行動する力が必要になります。皆さんが現場で汗を流したり、悩んだり、葛藤したりする経験は無駄にはなりません。その泥臭い経験は、必ず自分の武器になります。それを知識や学問に変えていくこともできます。

大体大生には、「泥臭くやり切る」と「なぜ」と考えること。この二つを大事にしてほしいと思います。



ゼミ生とスポーツイベントの現地研究調査

日本運動生理学会大会

本学で3度目。大会長に足立教授

第34回日本運動生理学会大会が8月20、21日、大阪体育大学で「求められるエビデンス、エクスペリエンス」をテーマに開催され、延べ約500名の研究者、企業関係者、学生会員らが参加した。

本学での開催は2000年（大会長・金子公有現名誉教授）、2018年（大会長・梅林薫現名誉教授）に続いて3回目。本学が共催し、大会長はスポーツ科学部・足立哲司教授（トレーニング科学）が務めた。

また、本学トライアスロン部、陸上競技部投てきブロック、関西大学の学生がスタッフとして運営のサポートにあたった。

開会式では神崎浩学長が「本学で3度も学会大会が開催されることは大変名誉なことです。2日間の学会が皆様に有意義なものになることをご期待します」とあいさつした。

続いて足立教授が大会長講演を務め、これまで実践してきた陸上中長距離やトライアスロンなどのトレーニングについてデータを交えて解説した。

また、特別シンポジウム「競技力向上のために求められるエビデンス、エクスペリエンス」では、本学スポーツ局長、スポーツ科学センター長の梅林薫名誉教授が「競技力向上へ向けた現場と科学を結びつける！ テニス協会、大学の指導

現場の事例を中心として！」のテーマで講演した。



日本運動生理学会大会で大会長を務めた足立哲司教授



特別シンポジウムで講演する梅林薫名誉教授

「めざせ!!スポーツマスター」 ブレイザーズ招きバレー教室

社会貢献センターは泉大津市教育委員会から委託を受けて、スポーツ体験プログラム「めざせ!!スポーツマスター」を実施している。バレーボールSVリーグ・日本製鉄堺ブレイザーズの選手を招いた「ボールを打ってみよう」が7月25日、第5回として泉大津市立総合体育館で開催された。

大宅真樹選手、上村琉乃介選手、柿崎晃選手が参加し、技術指導。本学の学生5人がアシスタントを務め、泉大津市内の小学3年生以上の児童がバレーボールの基礎やゲームを楽しみながら学んだ。「めざせ!!スポーツマスター」は全8回。運動が苦手な子どもにもスポーツの楽しさや達成する喜びを伝え、学生にとっても実践的な指導力やコミュニケーション力を養う学びの機会となっている。

ブレイザーズの選手は、子どもの目線に立って丁寧に技術を指導し、「上手！」「いいね！」と声を掛けると、子どもたちはとてもうれしそうに表情を浮かべていた。

柿崎選手は小学生の頃、所属していたバレーボールチームにオリンピック銅メダリストが来て、ワクワクしたことを覚えていて、「いつか自分もそういう活動をしてみたいと思っていました。子どもと関わる経験は自分にとってもモチベーションが上がってプラスになります」と話していた。



ブレイザーズの選手、本学学生と子どもたち



児童にスパイクの打ち方を教えるブレイザーズの選手

大阪府警の警察官が 本学でコーチングを学ぶ



笑顔が絶えなかった土屋裕陸教授との研修

大阪府警察 本部で警察官らの教育・研修を担当する警務部教養課の警察官19人が8月5日、大阪体育大学を訪れ、スポーツ科学部・土屋裕陸教授の指導でコーチングスキル研修を受講した。

生方が若い警察官を育てていらつしやることを知り、うれしくなりました。西祐司・警務部教養課長の話

参加者がみんな目を輝かせて講演を聞き、良かったです。土屋先生は知識の引き出しを数多く持たれているので、継続的に開催できればと考えています。

研修会は、西祐司教養課長が本学で毎年開催している日本スポーツ協会公認のスポーツ指導者資格講習会にプライベートで参加し、土屋教授の講習を受講したことがきっかけで、初開催された。大学が学内に警察幹部を招いた講習会の開催は全国的にも珍しい取り組みだ。

教養課は各都道府県警察本部に置かれ、警察官、警察職員の教育・研修を担当し、柔道・剣道・逮捕術・拳銃などの術科訓練も行なう。研修会では指導者として必要な知識や心構えを中心に解説された。

土屋裕陸教授の話

警察幹部の方との学びの機会は初めてでしたが、皆さんとてもフレンドリーで前向きな方が多く、こういった素敵な先



本学でコーチングスキルを学んだ大阪府警の皆さん

徳之島の中高校生が来学 「テニスの科学」など学ぶ

鹿児島県の離島、徳之島にある徳之島町の中高校生9人が7月27日、本学を訪れ、スポーツ科学を学んだ。

関西圏の企業や大学などを訪問して豊かな職業観を育み、進路について理解を深める「徳之島町インターンシップ教育事業」の一環。中学3年生から高校2年生の9人が5泊6日で関西を訪れた。

中高生は徳之島町教育委員会関係者ら5人と大阪体育大学を訪問し、社会貢献センター長のスポーツ科学部・富山浩三教授の説明を聞いた。

一行はその後、第6体育館多目的アリーナで、テニス部女子監督を務めるスポーツ科学部・岡村修平講師のミニ授業



サーブのスピードを上げる方法を学んだ後、実際にサーブを打つ生徒

「テニスの科学」を受講した。

岡村講師は徳之島出身。授業の冒頭では島の歴史や親せきが近くにいる町民のつながりが強い島の良さを郷土愛たっぷりに語った。その後、サーブのスピードを向上させる体の使い方を科学的に説明し、中高生は全力でサーブを打ち込んでいた。



大阪体育大学でスポーツ科学の一端に触れた徳之島の中高校生と同郷の岡村修平講師

教育後援会役員会を開催 父母らの代表が事業計画・予算審議

令和8年度の大阪体育大学教育後援会役員会が6月20日、大会議室で開かれ、学生の父母ら代表と神崎浩学長、浪商学園・野田賢治理事長、大学の教職員が出席した。

役員会では、冒頭に西岡潤哉会長が「昨年の学生たちの躍進には、目を見張るものがありました。私たち教育後援会も、これまで以上に手厚く、かつ学生ファーストな支援を届けていきます」とあいさつした。

神崎学長、野田理事長のあいさつに続いて議事に移り、令和

助、就職振興、入学・卒業行事への援助などを盛り込んだ事業計画、予算案が承認された。

7年度の事業、決算が報告、承認された。その後、令和8年度役員への推薦に移り、花見明子副会長が新会長に推薦され、西岡会長が退任のあいさつを述べた。

◇新役員候補者のうち会長、副会長、会計監査は次の皆様◇

▽会長 花見明子

▽副会長 伊藤絵里香

▽会計監査 仲村秋乃、田中聡

(敬称略)

令和7年度大阪体育大学教育後援会決算書 収入の部

費 目	決 算 額
会費収入	33,948,000
前年度繰越金	14,909,006
利息	42,407
学生徴収分	18,800
計	48,918,213

支出の部

費 目	決 算 額
1) 学生援助費	
①課外活動	0
②大学祭	500,000
③学生生活支援	7,536,220
④傷害治療援助	5,886,667
⑤就職振興	2,641,139
⑥入学行事	1,493,800
⑦卒業行事	1,809,500
⑧慶弔記念費	434,000
⑨災害見舞金	0
2) 教育援助費	
クラス活動	0
①大学院研究活動	418,450
②文化厚生	5,500,000
3) 課外活動特別援助	5,000,000
4) 運営費	
①会議費	187,400
②会報費	3,005,847
③事務費	1,273,918
5) 予備費	0
6) 特別経常費	2,000,000
7) 特別会計繰出金	0
8) 次年度繰越金	11,231,272
計	48,918,213

特別会計(特別対策基金)収入支出決算書

項 目	収 入	支 出
前年度繰越金	60,396,591	0
今年度繰入金	0	0
今年度繰出金	0	0
定期利息	127,951	0
次年度繰越金	0	60,524,542
計	60,524,542	60,524,542

令和8年度大阪体育大学教育後援会予算書 収入の部

費 目	予 算 額
会費収入	35,088,000
前年度繰越金	11,231,272
利息	15,000
学生徴収分	500,000
計	46,834,272

支出の部

費 目	予 算 額
1) 学生援助費	
①課外活動	1,000,000
②大学祭	500,000
③学生生活支援	7,250,000
④傷害治療援助	7,500,000
⑤就職振興	4,500,000
⑥入学行事	933,000
⑦卒業行事	2,500,000
⑧慶弔記念費	600,000
⑨災害見舞金	100,000
2) 教育援助費	
①大学院研究活動	1,000,000
②文化厚生	5,500,000
3) 課外活動特別援助	5,000,000
4) 運 営 費	
①会議費	180,000
②会報費	3,300,000
③事務費	1,400,000
5) 予 備 費	5,571,272
6) 特別経常費	0
7) 特別会計繰出金	0
8) 次年度繰越金	0
計	46,834,272

特別会計(特別対策基金)収入支出予算書

項 目	収 入	支 出
前年度からの繰入金	60,524,542	0
定期利息	900	0
今年度繰入金	0	0
今年度繰出金	0	0
次年度繰越金	0	60,525,442
計	60,525,442	60,525,442



◆日本最大級のスポーツ総合サイト「スポーツナビ」に広報室が公式情報として発信した記事数が、1000本を超えました。全大学で2位です(本学調べ)。インスタグラムも、フォロワーは3月末から2400増えて8700(9月24日現在)でスポーツ・体育を名称に掲げる大学では最多になるなど、情報発信に努めています。

◆スポーツナビを重視するのは、大学の研究や教育の成果を社会に広く伝えることで、読み手の疑問や社会課題の解決に役立つ大学メディアでありたいと考えているからです。また、学生のクラブや社会貢献の場での活躍を広く紹介することで、学生のさらなる成長の後押しにつながればと考えています。

◆メディアにとって、生成AIという新たな「読者」が登場しました。AIはウェブ上に公開された膨大な情報をもとに知識を整理し、人はウェブだけでなくAIから情報を得る時代になりました。その傾向は年々強まるでしょう。大学が教育・研究成果や学生の活動を一次情報としてウェブで発信しなければ、AIの回答には残りません。いかに大学の活動をAIに読んでもらうか。大学の新しい社会的責任と考えています。

【大坪康巳】

ファッションは個性か、基盤か



コラム **ボーシャー**

名誉教授 和田隆夫

1960年代後半から1970年代前半の若者は、精神がアンビバレントだった。ばくもそうだった。つまり社会に対して相反する感情を持っていた。大きく言えば、政治に対する否定的認識とその政治を大きく左右するアメリカの文化に対する憧憬である。

ばくは、1967年に高校に入学した。2年生の冬、東京大学の入試が、安田講堂攻防戦をへて中止された。驚天動地だったが意外ではなかった。当時の学校はいたるところ闘争だらけだった。

ばくの高校でも学校封鎖や全校集会があり、またベトナム戦争反対運動も盛んで、小田実らの「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）の活動に魅了されていたものだ。

その反面、アメリカから入ってくるものすべてに憧れていた。中でもジャズとの出会いは、ばくに精神的な安らぎを与えていた。

当時、若者は最新の流行をラジオや紙媒体から知ることが多かった。たとえば1964年に『平凡パンチ』、1966年に『週刊プレイボーイ』が創刊され、それに続いて女性向けの『an・an』（1970年）『non-no』（1971年）が創刊されている。大学で出会った妻は、ばくにとってアンノン族の一人で眩しかった。大阪では1971年に『プレイガイドジャーナル』（プガジャ）が創刊され、非常に大切な情報源になった。東京では翌年『ぴあ』が創刊されている。

多くの若者は、ベトナム戦争に反対して反米的でありながら、アメリカ文化に夢中になっていた。この狂熱の時代だからこそ、高校生はばくには隠れた問題があった。それはファッションである。問題が隠れた原因は、見た目を気にすることになにか後ろめたさを感じたからである。今からみれば、おかしい感情だった。

ばくが育った地区は、大阪らしさが色濃く残っているものの、新しいオシャレとは縁遠かった。それでもばくは、その地区の商店街を特別な存在と考えていて、服も靴もこの商店街で買い、特別な工夫もせず着ていた。母は北堀江で育ち、女学校時代は近所の心斎橋筋商店街を闊歩していたようだ。ばくが通った商店街と、母が親しんだ心斎橋筋商店街との違いは大きい。

幼少期の写真を見ると、ばくは少しめかし込んだ服装をよくしている。母の嗜好だったのだろう。ところが幼稚園児の頃には、どろんこ遊びが大好きで、好んで水たまりに入り、ポケットにはカタツムリやダンゴムシを押し込んでいた。そのうち、洗濯しやすい丈夫な服を着せられるようになっていった。当時のばくは、そんな服装の変化に対して、ましてや母の気持ちに対してまったく無頓着だった。母は、自分の考えを強要しなかったが、何らかのイメージをもって、ばくを育てていたように思う。

高校の同級生に、制服の胸ポケットに櫛を入れ、人前でよく髪の毛を梳く男がいた。エチケツブラシも持ち歩いていて、なんだかいいなと思い、ばくもさっそく家にあった小さめの櫛を胸ポケットに入れたが、大きすぎてひどく目立っていた。

彼とは制服姿のつき合いだけで、私服姿を見たことがないので、本当のオシャレ度はわからない。けれども、いろいろ教えてもらった。アイビー、VAN、ボタンダウン、そして石津謙介の事。

やがて近所の書店で『メンズ・クラブ』を熱心に立ち読みするようになった。

ただしばくがアイビーを知った頃には、流行は落ち着き始め、定番・保守的なものとみなされつつあった。それにそもそも全身をアイビーで固めるのは高校生には高嶺の花だったので、小物やシャツなど1点だけ取り入れるスタイルだった。

ファッションの変化は早い。1970年前後には、グループ・サウズの流行で長髪が広まり、ミニスカートやジーンズが浸透していた。ばくもご多分に漏れず、大学生になると、アイビーとはかけ離れた長髪、ジーンズ、下駄履きスタイルになっていた。

しかし1965年刊行の石津謙介の『いつ・どこで・なにを着る』（婦人画報社）は歳を重ねるなかで参考にすることが多くなっている。彼の「個性が大切であることは言うまでもないが、個性にまで発達するには、まず基盤がしっかりしていなければ意味がない」という一節は、今でもあらゆる分野で大切だと思うし、ばくの人生の指針の一つでもある。

今年9月、リスボンから始めて南欧を旅した。旅の終わりはファッションの街ミラノである。ミラノ訪問の目的はレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」と出会うことである。ネットによる完全

予約制である。このため世界中の人を相手に、人気コンサートのチケットを取るつもりで臨み、どうにか次女が入手してくれた。「最後の晩餐」のあるドミニコ会修道院（サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会）の食堂に入れるのは一度に30人ほどで、時間は15分間である。

想像を超えていた。圧倒的な静の感動だった。名前も知らない異国の人たちと共有した15分間は、これからの心の支えになると思う。修復後の壁画は鮮明で、不謹慎かもしれないが、ばくは使徒ヨハネの描かれ方に魅入られてしまった。

ミラノ訪問には意外な贈り物があつた。今春、飛行機を予約してから知ったのだが、ミラノ滞在は、ちょうど9月22日から28日のミラノ・ファッションウィーク（2027年春夏ウィメンズ・コレクション）と重なっていたのだ。

22日が初日で、その日はVogue Worldが開催されていた。ドゥオーモ広場に行くと、スカラ広場との間を結ぶアーケード、ガッレリアは閉鎖され、中では招待客向けのイベントが行われていた。広場には人があふれていた。Vogue Worldの記念品販売所は人混みで近づけなかった。妻と次女は、着物を洋風にそれぞれ自分で仕立て直したものを着用して、おしゃれを楽しんでいた。

滞在中の知見に限るが、ミラノの男性で目立っただのは白シャツだった。裾はパンツの中に入れ、パンツは細身で、ベルトを締めて腰回りのラインを見せる。そうすると脚が長く見え、体型が整って見える。日本にはアメリカの影響で、シャツを外に出せばこなれ感が出るという風潮があり、ばくも真似していたが、考えさせられた。ドレスシャツを着ている人が多いためか、暑いのに長袖だった。

歩き方も、ばくとは違うように感じた。表現が難しいが、ばくは膝を曲げたまますり足のようによく歩くが、この時期のミラノで見た男性は、脚を伸ばしたまま踏み出して着地しているように見えた。この歩き方は洋服によく合っていると思う。その反面、ばくの歩き方は着物に合っているように思う。洋服を着るなら、ミラノの歩き方が基本なのではないかと思った。服を着こなす前に、身体の使い方という基盤があるのかもしれない。

ファッションは個性の表現と見られるが、個性を問題にする前に、まず基盤・基礎があるのだと実感した。この視点から、ばくは、洋服のあわせ方、着方、所作・歩き方について、ほとんど我流であったことを猛省した。

先に引用した石津謙介の言葉を思い出す。

「個性にまで発達するには、まず基盤がしっかりしていなければ意味がない」





本物を学び、極める

大阪体育大学

【大学院】

- スポーツ科学研究科
博士（前期・後期）課程

【スポーツ科学部】（1年～3年）

- スポーツ科学科

【体育学部】（4年）

- スポーツ教育学科
- 健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】

- 教育学科

大学事務局

庶務部、教育学部、入試部、広報室
キャリア支援部

大学附置施設等

図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター
国際交流センター、学習支援室

<https://www.ouhs.jp/>

OUHS ジャーナル 2026 年(令和 8 年) 10 月 9 日(金)

発行所：大阪体育大学 広報室 発行責任者 大坪康巳 協力：教育後援会・学友会

大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1 電話(072)453-7021 FAX(072)453-8818